

図2-7 有舌尖頭器  
(豊田字西河原出土)

しいと考えられるようになった。この有舌尖頭器は、地域によりその様相に差異がみられるが、概して、細石刃文化と縄文文化の間を埋める石器としてとらえられる。地質年代の洪積世末から沖積世初頭の地層中に包含されていると考えられるが、尾張東北部一帯から出土している十例は、すべてが地表から単体で採集され、確実な層位とか伴出物もみないものである。大口町内出土の有舌尖頭器とともに石鏃が採集されているものの確実な伴出石器とは認められない。

この有舌尖頭器のほかに、町内では柳葉型の尖頭器が出土している。用途はやはり、突いたり、刺したりするなどであるが、地表からの採集のために所属文化の位置づけが判然としない。おそらく有舌尖頭器よりもやや時代があとで、土器出現の前後の所産とみられる。北替地遺跡では、早期の押型文土器に伴って出土した例がある。

〔秋田字中原出土の有舌尖頭器〕長さ七・九センチメートル、厚さ九ミリメートルのチャート製である。調整剝離はやや乱れがあり整然としない。身部にくらべ舌部がやや短い。付近からは、搔器や剝片石器若干と多数の石鏃が採集されている。

〔秋田字北替地出土の有舌尖頭器〕上半分を折損している赤色チャート製。残存部の長さ三・五センチメートル、厚さ五ミリメートル、身幅が一・五センチメートルで舌部が幅広く作られ、平行剝離による調整がなされている。

〔豊田字狭間出土の有舌尖頭器〕二本あってともにチャート製である。一本は、長さ六・七センチメートル、厚さ六

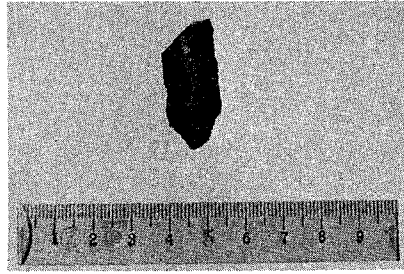


図2-8 北替地付近出土の尖頭器

ミリメートルで整然とした並行剝離がみられる。他の一本は調整や舌部のつくり粗雑な面がある。

〔大屋数字山間出土の有舌尖頭器〕長さ六・二センチメートル、厚さ八ミリメートルで形態が整っている。全面に磨耗がはなほだしいが、並行剝離による調整が両面にされている。全面がパテナ（古色）におおわれたサヌカイト状の石質でつくられている。〔大屋数字丸出土の有舌尖頭器〕上半分を欠失している。残存部の長さ四・三センチメートル、厚さ七ミリメートルのチャート製で、両面とも押圧剝離が浅い。基部の調整は良好で薄く仕上げられている。

〔秋田字宮浦出土の柳葉型尖頭器〕長桜の天神社付近で二本採集されている。

## 第二節 縄文時代

### 縄文遺跡の分布

尾張平野北部における縄文時代の遺跡の数は少なく規模も小さいものが多い。これは木曾川の乱流や氾濫、入鹿池の堤防決壊などによる土砂の流失によつて遺跡が破壊されたり、厚い土砂の堆積で発見が困難だったり、急激な開発で自然消滅したりしたと考えられる。あるいは、縄文時代の狩猟、漁撈、採集などが根本的な生活基盤であったことから、それを満たし得る条件を欠き、縄文人の活躍が十分でなかったために遺跡の分布が薄いかも知れない。

縄文早期の遺跡では、犬山扇状地の自然堤防州上に分布がみられ、おもなものは犬山市上野遺跡、大口町下林遺跡があり楕円押型文を主として出土している。刺突文や庄痕文では大口町北替地遺跡や地藏堂遺跡などがある。扶桑町や江南市、一宮市方面ではこの時期の遺跡は未発見である。洪積層が露頭する小牧市や春日井市などでは、わずか小牧市の織田井戸遺跡と総濠遺跡がみられたにすぎない。

縄文前期の遺跡はまったくみられない。ただ一片の土器片が一宮市千秋の佐野遺跡から出土しているにすぎず、きびしい自然環境や社会的な何らかの要因によって、前期の人々の活動をばんだものであろうと考えられる。

縄文中期ともなると遺跡の数は前期にくらべ飛躍的に増加する。一宮市佐野遺跡や大口町下林遺跡などは、比較的まとまった資料を出土する遺跡といえよう。尾張平野の自然環境が中期の人々の生活をささえうる地域として開拓の一步を踏み出した足跡といえよう。このほか岩倉市川井にあるのんべ遺跡、江南市河原山遺跡、扶桑町下林北遺跡、大口町東藪山遺跡、南山遺跡、寺東遺跡、下林遺跡、西山神遺跡、垣田遺跡、小牧市では小牧山南方の旧小牧御殿跡遺跡、舟津遺跡、春日井市では石器のみ出土する篠木遺跡、犬山市の尾崎遺跡など小規模な遺跡が点在している。いずれもキャンプ的な様相を呈し、長期にわたる住居生活を営んだとはみられず、遺物が少量で断片的な資料にとどまっている。

縄文後期の遺跡では、尾張平野を代表した大遺跡である一宮市馬見塚遺跡がある。この遺跡は古くから注目されてきた縄文後期から晩期、弥生時代、古墳時代に至る複合遺跡である。このほか後期の遺跡は、江南市、扶桑町、大口町、犬山市、小牧市、春日井市などの地域にはみられない。縄文中期の遺跡数にくらべ極端に少なく、大きな周期的な変化があったとみられる。

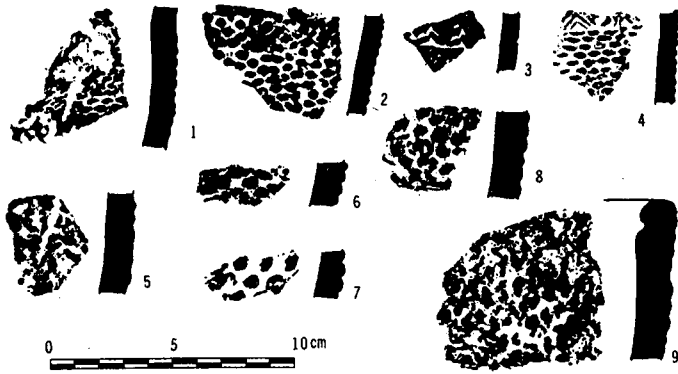


図2-9 下林遺跡出土の押型文土器

縄文晩期はさきの一宮市馬見塚遺跡、大口町西浦遺跡、神明下遺跡、扶桑町花立遺跡、江南市小折遺跡、角畑遺跡など分布は極めて希薄になる。とくに晩期の遺跡と遺物についてはつぎの弥生時代へ推移発展し、また文化伝播の系統からも重要視されるものである。

#### 下林遺跡の押型文土器

大口町が扶桑町と境界をなした小口字下林は、大口町の飛地となっていたところで、内田車両の北側に位置する。昭和三八年に発掘調査がなされ、縄文早期と中期の土器や石器が出土した。

早期の土器はすべて楕円押型文であり、粗大な楕円文と米粒大の楕円文、それに山型文を併用したものがある。粗大な押型文は、赤褐色を呈し、胎土に長石粒を含んだ焼成のあまり良くないもので、器壁は厚さが一センチメートルから一・七センチメートルまでである。米粒大の押型文は上部に山形文を併用し、文様が明瞭に整然と施文されている。暗褐色の色調で、器壁は厚さが一センチメートル、焼成は中等度である。器形は砲弾状をなした尖底の深鉢である。

縄文早期や前期の遺跡は、知多半島や名古屋市南部、三河部に多くみられ、名古屋市以北の尾張平野には極めて少ない。犬山市に一

か所、小牧市に二か所、大口町に三か所のみである。

### 地藏堂遺跡

の 小口字地藏堂地内の畑から縄文早期の押型文土器が出土している。出土範囲は約三十平方メートル以内の範囲に限られるが、近辺全体が弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡となつて、さまざまな出土品がある。

### 押型文土器

押型文土器は、茶褐色を呈し、厚さ一センチメートル内外の器壁をもつたもので、焼成不良のため磨耗し易い。器面の押型は、斜格子文と菱形格子目文の二種類がみられる。胎土の中に繊維は含んでいないが、石英や長石の細粒を多く混入している。

この押型文に類似した土器は、秋田の北替地遺跡から出土するが、地藏堂遺跡は出土量も少なく、厳密な比較は無理であるものの北替地の土器よりも明るい色調を呈している。この遺跡は、北替地遺跡とほぼ同じ時期とみられる。また、先土器時代の西山神遺跡とは、わずか三百五十メートル、早期の下林遺跡までは七百メートルの位置にある。

このような押型文土器は、中部地方西部から九州地方まで波及している。近県にある早期の代表的な遺跡は、大阪府神宮寺遺跡、奈良大川遺跡、長野県桶沢遺跡、岐阜県九合洞窟遺跡がある。

### 北替地遺跡

遺跡は秋田字北替地にあつて舌状にのびた台地状の南端近くに立地する。南側は沼田と称される低湿地の水田が広がり、かれることのない湧泉がある地形であつた。

この北替地は古くから小型の打製石鎌がよく採集され、土器も十数点が採集されていた。しかし、その中心となる場所は確認されていなかった。昭和三十七年吉田製線の工場用地として整地されたおり、土器の包含層が確認されて昭和三十八年に発掘調査がなされた。

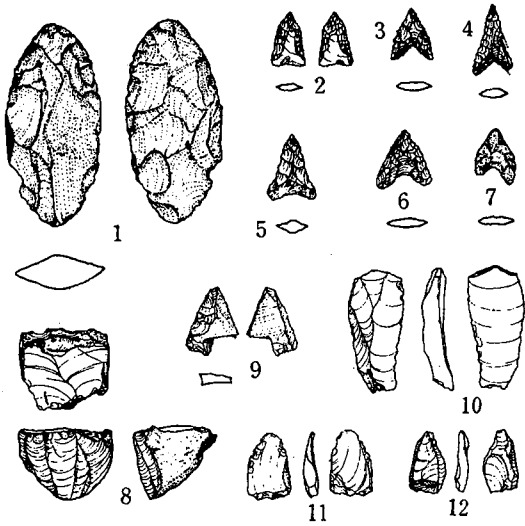


図2-10 北替遺跡出土の石器(いちのみや考古No. 6)

子目押型文などがある。

北替地出土の押型文土器は前述のようであるが、この時期の遺跡としては、岐阜県恵那市の上鐘遺跡、山県郡九合洞窟遺跡、豊橋市嵩山洞窟遺跡、岡崎市村上遺跡などが知られている。

発掘調査の結果はつぎのように報告されている。「北替地の土器は、あるいはより古く、爪形文土器の時期からそ

発掘地点の基盤である礫層は、鳥居松面に比定される洪積層で、上部に黒色土層が堆積していた。遺物はこの黒色土層に包含されていた。

調査によって出土した土器は、縄文時代早期の押型文土器と石器である。押型文は棒状器具による羽状圧痕文の一群と回転押捺手法による山型押型文や格子目押型文とがみられる。刺突文を施した土器は、楕円形もしくはこれに近い形をした刺突文を縦位または横位に連続して押捺したもの、半月形や三日月形の爪形文をめぐらしたもの、半割竹管様の器具による三日月型刺突圧痕文や斜位の格子目押型文をめぐらしたものの、雁音状の刺突文や断面が長方形の棒状器具による連続刺突文などがある。

回転押型文では、横位の山型押型文、斜格子目文、菱形格

れ程下らない時期にくるのではないか(安達厚三)とか、「刺突文の一部は大川遺跡、大阪府神宮寺遺跡に類例が求められ、また、格子目押型文は大川遺跡、立野遺跡、九合洞窟遺跡、村上遺跡、三重県照光寺遺跡などに類品をみる事ができる。しかし、土器の文様の組み合わせや器形、焼成などには、これらの諸遺跡とかなりの相違が認められる。

……刺突文土器と押型文土器を別型式としないならば、北替地遺跡の土器を一型式として認めうる可能性も強いわけである。いずれにしても、刺突文土器はいままでのところ、樋沢式にも立野式にもともなわず、ほかにこの地域では類例を知らない。」(大参義一外 いちのみや考古 第六号 北替地遺跡発掘調査報告)とのべている。

発掘調査で出土した石器は、一点の尖頭器と六点の石鏃、石核、若干の剥片である。

尖頭器は木葉形尖頭器で、横削ぎ技法により剝離された剥片を用いて作られ、長さ七センチメートル、厚さ一・二センチメートルの安山岩製である。石鏃は、小型のもので有脚鏃と五角形状のものなどである。石核は角錐状のもので比較的形が整っている。

### 下林遺跡

下林遺跡は丹羽消防署の北側一帯で大口町から扶桑町にかけた範囲である。発掘調査が実施されたのは上小口から高雄へ向かう道路の東側の畑であり、当時は桑園となっていたが、工場用地として整地された時点で発見された。

表土はすでに削除されてしまい、第二層めが黒色土層、第三層は砂礫層となつて洪積層の赤褐色土がみられた。遺物包含層は第二層で少量の縄文早期中葉の楕円押型文と楕円押型文に山型押型文を組み合わせた土器片、弥生前期の条痕文土器があり、大部分は縄文中期のものである。石器は短冊型打製石斧十三本、黒耀石の打製石鏃一点、搔器二点、凹石二点、石棒一点などが出土した。



図2-11 下林遺跡出土の縄文式土器



土器は壮大な波状の把手をもった深鉢形土器で、口縁部や胴部を剛直な隆起線文で区画し、爪形文や竹管文で裝飾した厚手の勝坂式がある。勝坂式土器は中期でも中部山岳地帯における分布が濃密であり、平野部は希薄となる。

下林遺跡の主体となる土器は、隆線による渦巻文をつけ篋描きの斜線列をつけたもの、捺糸文を地文としたもの、縄文地に凹線による渦巻文を併用したもの、隆起線文で口縁部を方形に区画し、その中を竹管で沈線をめぐらしたものの、篋描き沈線で渦巻文や曲線文、八の字状の文様をつけているもの、半月状の刺突文を連続してつけたもの、口縁部を凹線で渦巻状に飾ったものなどがみられる。

主体をなす土器は千葉県加曾利貝塚出土の土器を標式とする加曾利E式土器で、広範囲な地域に地方色をみせながら普遍的に分布するものである。器形はキャリパー状の深鉢形が多く、文様は渦巻文と縄文を併用したものが主である。

これらのうち比較的古い要素をみせるものもみられるが、多くは中期の新しい部分に比定されるものや本来の加曾利Eに近いものもみられる。中には瀬戸内系の里木式の影響をうけたものや、長野県八ヶ岳南山麓の曾利遺跡の土器、知多郡南知多町咲畑貝塚に類例がみられる土器、一宮市千秋町佐野遺跡出土の土器の中にも類似した土器がみられ、中期文化の伝播を知ることができる。

下林出土の石器の中で注目されるのは、一点の黒耀石製石鏃と短冊形打製石斧十三点である。近辺に産出しない黒耀石の存在は他地域との交流の一端をうかがい得る資料である。打製石斧はせまい範囲内に多量にみられる点である。長野県を中心として研究を推進させた藤森栄一は「日本原始陸耕の諸問題―日本中期縄文時代の生産形態について―」（歴史評論、四一四 昭和二五年）の論文中に、中部山岳地帯における縄文時代中期の遺跡では、打製石斧や石皿が多

く、石鏃の少ないことをあげて、縄文農耕の可能性を論じている。

石斧の機能については、一九二七年、神奈川県勝坂遺跡の発掘において出土した五十三点の石斧について、片面加工の石斧が物を割るのに不適當であると、土搔きと考え縄文中期に農耕が始まったと提唱した。その後、飛驒や中部山岳地帯に多い石皿を中心に研究を進めた澄田正一をはじめ別の観点から直良信夫、酒詰仲男、賀川光夫など多くの著名な学者がそれぞれ研究をすすめている。

下林遺跡の出土遺物の様相から、何か共通の課題を察知し原始農耕の可能性もうかがえ後考の結果を待ちたい。

### 垣田遺跡

余野字垣田の県営住宅地内にある。住宅の東側で南北にのびた帯状の水田地帯があり、そこへ張り出した舌状の住宅地の先端に立地している。表土は黒灰色の有機土層で、第二層は黒色土層、第三層は礫層

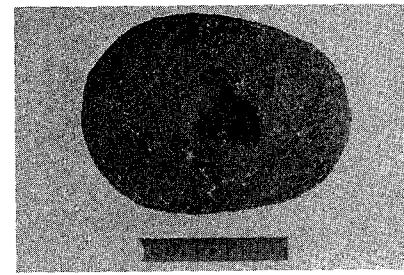
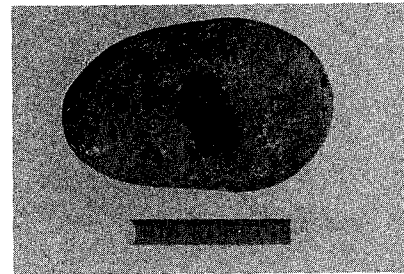
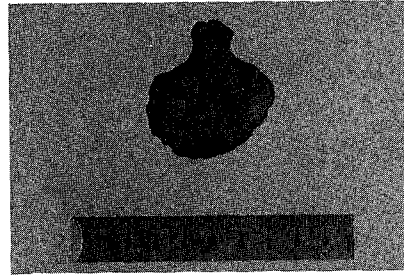
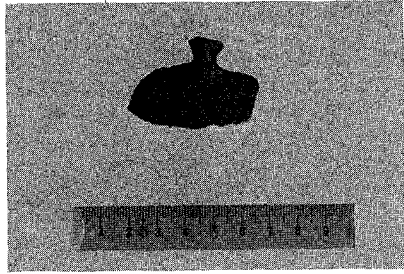


図2-12  
下林遺跡出土の石匙と凹石



図2-13 垣田遺跡出土の縄文式土器



図2-14 垣田遺跡出土の石斧

となつてゐるが、遺物包含層は第二層である。出土遺物はこの遺跡から東北方面へ約八百メートルにある下林遺跡の出土土器と酷似した縄文式土器である。

深鉢形土器は、口縁部を肥厚させその下部に竹管状器具による凹線をつけて渦巻文をつけた一群と無文の一群がある。小形の鉢形土器も竹管状器具による凹線をめぐらせてゐる。胴部の文様は簡略化されて浅い綾杉文を施したり、条線の形式的な組み合わせにとどまつてゐるものもみられる。また中期中葉にみられる渦巻文の中に縄文を施したものや捺文を施したものも散見できるが、全体としては、口縁直下の渦巻文も変化に乏しくまたは口縁横帯文も略式化されているなどから、縄文中期末葉に属する時期だと考えられる。

伴出した石器は、長径十六・五センチメートル、短径十四・八センチメートル、重量一・二七キログラムの幅広い打製石斧で、石質は安山岩である。

### 西山神遺跡

遺跡は小口字西山神の東北端に立地する。付近からは短冊型打製石斧や土器片が採集される散布地であったが、工場や宅地などが建てられ、調査ができない遺跡に変わってしまった。

採集された縄文式土器は一個体分で、器形は口縁部がやや開いたマユ形である。口縁部をまるく肥厚させて外面に棒状器具による刺突を連続して施文している。口縁部直下から竹管状器具による凹線でU字状の主文を上下に施し、その間に従位の浅く細い凹線を数条つけてゐる。焼成はあまり良好といえない。

この土器は、人頭大の丸石を三個据え置きその中に灰と土器片がまつていた。住居址とみられたがブルドーザー

によって削平されたために、実体の把握ができなかった。

この炉址近くからは、磨製の定角石斧が一点出土した。刃部を欠損したもので、残欠部の長さは六・七センチメートル、幅五・一センチメートル、厚さ二・二センチメートルの輝緑凝灰岩製で表面はよく風化している。

このほか、付近で採集された短冊形打製石斧や打製石鏃若干があるが、縄文中期末葉のものとみられる。

### 中原遺跡

秋田字中原の東側一帯の畑地である。周辺は平坦な地形をなし、水田地帯と畑との比高は数十センチメートルで特に大きな高低差はみられない。

中原一帯は古くから短冊型打製石斧や縄文時代の打製石鏃が多く採集され、付近に良好な遺跡の存在が推定される。ここからは縄文中期ごろと推定される石棒や、先土器時代終末期ごろの有舌尖頭器や凹状石器、剝片などが採集されているが、包含層や中心となるべき地点は不明である。

### 東藪山遺跡

秋田字東藪山からは、加曽利E古式と加曽利E新式の土器が採集されている。古式のものには隆線を主文とし、新式のものには、常清市石瀬貝塚出土の石瀬型土器に類似した施文をみるものである。土器は黒色で焼成が良い。土器片が発見された地点からは炉址も発見されているが、正確な記録は残されず土器片のみで、遺跡の様相は不明である。

### 南山遺跡

秋田字南山で細石刃や縦形搔器が採集されているが、正確な場所は明らかでない。宗雲の部落の西側にのびた竹藪と水田との境界付近は、縄文中期の渦巻文を施した土器片が発見されており、包含地はおそらく竹藪の下あたりと推定される。また別地点では、土師器を出土する良好な包含地がみられたが、破壊されてその存在価値を失ってしまった。

## 西浦遺跡

西浦遺跡は大口町大字余野字西浦にあつて、縄文時代晩期の最末期に位置づけられる遺跡である。遺跡付近は起伏の少ない平坦地で、木曾川の乱流によって流出した砂質土が堆積し、かつては桑園地帯であつたが、近年になつて急激に宅地化が進行した。

遺跡は昭和四〇年に発掘調査された。層序は第一層が黒灰色の耕作土、第二層が黒色有機質のシルト層、第三層が黄灰色シルト層、第四層は黄色砂層、第五層は黄色微砂層の順であつた。遺物の包含層は第一層の下部で、約八十点の土器片が出土した。これらの土器は粗製土器、凸帯文土器、有文精製土器、遠賀川式土器、そのほかなどである。

粗製土器は無文で胴の張らない深鉢や壺形土器がある。また、条痕文を施した粗製土器は深鉢形土器が主であり、器面の調整はアナガラ属の貝殻の腹縁を用いたり、粗い櫛状器具を使って横位や斜位に条痕を施している。土器の口端面は丸味をおびたり、平切りにして面取りをしたものや、指頭による押圧痕をみるものなどがある。

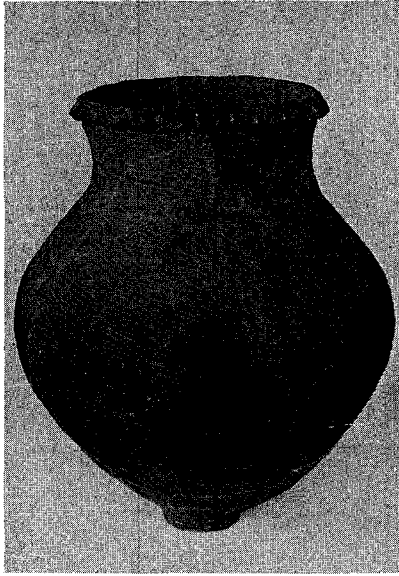


図2-15 西浦遺跡出土の土器

凸帯文をもつ半精製土器は、器面を細くて浅い条痕によつて調整しているもので、口縁部の凸帯上に大きな指頭による圧痕を連続して加えたもの、細くて低い小さな凸帯上に貝殻または、櫛状器具による圧痕を押しき状に加えたもの、大型の壺形土器で、口縁部にめぐらされた二本の凸帯は丸味をもち、断面が三角形をなすものなどがある。

文様のある精製土器では、浅鉢形土器で内外面とも研磨され、頸部は無文帯として胴部の上半部に浮線網状文をめぐらしているものや、口縁部をめぐる細い隆起帯に刻み目があり器面に朱塗りのあとがみられるもの、口縁部に太い沈線による羽状文をめぐらせ、浮線網状文をもつものなどがみられる。

遠賀川式土器は頸部に一本の沈線をひき、上胴部に三本の沈線をめぐらし、その間を削り出し、凸帯状にあらわしている。形態は全体に縦長で胴張りが少なく、口縁部の開きも小さいなど古い様相を示している。

そのほかの土器には条痕をのこすものや無文で研磨されたもの、沈線のみをみるもの、波状口縁をもつもの、圧痕を施した凸帯をもつものなどである。(大参義一「名古屋大学文学部研究論集」)

これらの土器の用途は大型の壺形土器が貯蔵用の容器、深鉢形土器は煮沸用で、小型の土器は飲食用に使われたようである。捕獲した鳥獣や魚介類、收拾した植物に加工を加えて保存したり調理し、食生活の充実をはかったとみられる。とくに石皿やすり石が存在したことから、粉食も考えられ、岐阜、長野、新潟などの縄文中期の遺跡からパンやクッキー状の炭火物が発見されていることからもうかがえよう。

### 神明下遺跡

余野字神明下にあるこの遺跡は、防火用貯水池を掘る工事によって発見された。地表下約三メートルの砂礫層に包含されていたが、破片は角がつぶれたり、表面に磨耗のあとがみられないことから原位置あまり動かなかつたと考えられる。土器は縄文晩期の精製土器や無文の粗製土器、条痕文土器、弥生前期の土器片である。いずれも破片が小さく全体の器形を復原し得るものはなかった。条痕文土器は、口端に面取りを施し口縁部から右下がりにアナダラ属の貝殻の腹縁を使って浅い条痕を施したものや、口縁部の外側に凸帯を付けたもの、口縁部が丸味をおび、浅い条痕を付けたものなどがみられる。弥生前期の壺形土器の破片も少量みられるが、無文で器面が

研磨されたように滑らかで黒褐色を呈している。

このほか、これらの土器が発見された地点から南西へ約五十メートルの地点では、磨製石剣の折損した先が一点採集されている。

神明下付近は、縄文晩期のころの地形と弥生前期のころの地形とは相当の差がみられる。かつては起伏に富み現状からみると想像もつかないような地形だったようである。余野神社の南方にかかる橋の下を発掘した折、地表下約五十センチメートルからは、流木や加工された木材が埋れていたし、以下二メートルあまりまでの層は、十層あまりの洪水による堆積が重ねられていたことが判明している。少なくとも千年余り前は一・五メートル余りも低い水田地帯であり、二千年前後には両側にある自然堤防州の畑は、現在よりも一メートル余りも低い地形であったとみられる。

## 石 棒

石棒は縄文時代の所産と考えられ、中期ごろは長大なものが、後期や晩期では小形のものが多いようである。形式には無頭式、単頭式、両頭式などがある。頭部に彫刻文を施す例もみられる。石棒の用途については、性器崇拜や権威、武勇を象徴するものとも考えられるなど、本来の用途は不明である。関東、中部地方

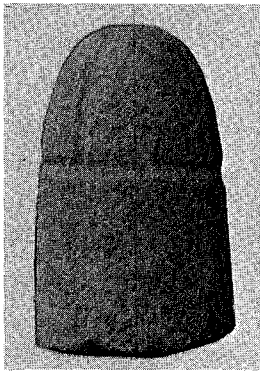


図2-16  
中原遺跡出土の石棒

では江戸時代に道祖神として祭られることが多かったことから大口町出土の石棒については再考の余地がある。

豊田字西屋敷七十八番地出土の石棒は、全長三十五センチメートル、頭部の長さ十センチメートルで基部の断面は楕円形をなし、長径十四・六センチメートル、短径十一・四センチメートルを測る。石面は全面にわたって大まかな調整を施し、研磨された様子はみられない。頭頂面は平らで傾





図2-17 秋田字宮浦出土の石棒

斜している。石質は凝灰岩で単独の出土である。秋田字兎十七番地出土の石棒は、昭和四一年の土地改良の排水路工事中に二個体が出土したが伴出遺物はない。二個のうち一個は形が悪いが、大きい方は形がよく整っており全長三十二センチメートル、断面は楕円形で胴まわり七十一センチメートルである。頭部は長石の部分をうまく利用しており、胴部は花崗岩で基部が円底状を呈している。全面によく研磨されて滑らかな体面を呈し、光沢がある。小さいものは長石の部分を頭部としているが全体に傾斜した胴体をなし、花崗岩の体面が磨かれている。石棒とするにはやや不安を感じるが、人工の手が加えられていることから参考品と考えられる。

秋田中原八十二番地出土の石棒は、昭和初年ごろ竹藪の開墾中に発見された。付近は縄文中期の遺跡があり、打製石鏃がよく採集される畑地帯である。全長二十四センチメートル、胴まわり四十三センチメートル、断面がやや楕円形をなした花崗岩製の無頭石棒で、頭部に十字状の陰刻がある。頭部と胴部はやはり、鉢巻状の陰刻によって区別する意図がうかがわれる珍しいものである。

秋田字宮浦出土の石棒は、全長三十三・八センチメートルで重量十キログラムの花崗岩製である。頭部は約七センチメートルの長さで、胴径と同じ張りの頭径をなし、わずかな抉りを入れて頭部をつくり出している。全面はざらざらとした粗面である。断面は楕円形をなし、長径十四・三センチメートル短径十一・三センチ

チメートル、頭頂は平らであり、基底面も平らな載切である。町内出土の石棒ではもつとも形状がととのっている。小口の下林遺跡から出土した石棒は、縄文中期の土器を伴出しており、大口町内出土の石棒中、唯一の時期が判明している資料である。全長十八・七センチメートル、頭部は花崗岩に付着した白い長石の部分をうまく利用して亀頭状につくり出している。全面に粗雑な調整を施している素朴な小形石棒である。

### 第三節 弥生時代

**尾張** 尾張における弥生文化の発展は西春日井郡清州町の貝穀山貝塚や名古屋市北区西志賀貝塚にはじまる。これらの貝塚の下層から発見される多くの土器は、北九州から出土する遠賀川式土器で、弥生時代の前期に用いられたものである。この土器が、農耕技術の伝播とともに土器製作の技術と密接な関係を持つ

#### 弥生文化

ものと考えられることから、弥生文化の発展を知る手がかりともなる。縄文文化のあとをついで、まず貝穀山貝塚や西志賀貝塚を中心とする文化圏と畿内を中心とした弥生文化圏とは、ほぼ同じ時期に形成されたと考えられる。この貝穀山・西志賀文化圏の周囲には、三河を中心とする縄文文化の系統と思われる水神平式土器の文化圏であった。縄文晩期から弥生前期にかけての主な遺跡は、一宮市馬見塚遺跡、弥勒遺跡、元屋敷遺跡、大口町の西浦遺跡など、尾張では数か所が知られている。

この前期の弥生文化が発展して地方に普及し、それぞれの地域で地方色豊かな土器文化が開花する。この時期が弥生中期の第二の発展段階で、朝日式、貝田町式、外土居式、爪郷式というような形式が生まれている。このうち、古